

私のなかの戦争 = 戦争体験を語る(第 2 集) =

2020 年 12 月発行 西神ニュータウン 9 条の会 @300 円

(INDEX) 50音順

- <出原基五郎(大阪府和泉市)> 中国の戦場で…左目とひきかえに命を長らえて (2021.8)
- <川端 泰子(春日台)> 神戸大空襲の記憶 (2021.7)
- <北浦 隆(美多賀台)> 終戦がもっと早ければ… (2021.10)
- <小机 夏つ子(美賀多台)> 教科書の墨塗りをさせられて… (2022.2)
- <小林 清二(春日台)> 「一億一心」 (2022.6)
- <白井 博美(伊川谷町)> 父は必ず帰ってくると… (2022.4)
- <高島 照子(糀台)> 小学生から毎日が戦争の中に… (2021.12)
- <高橋 壽(糀台)> 「模擬爆弾(原爆パンプキン)も投下され…」 (2022.7)
- <西藤 富司江(須磨区)> 戦前・戦後もひもじさが… (2021.9)
- <馬場 功(竹の台)> 戦争体験から戦後社会へ (2022.8)
- <平山 祐子(富士見が丘)> 朝鮮で終戦を迎えて… (2022.5)

## 中国の戦場で・・・左目とひきかえに命を長らえて（2021.8）

大阪府和泉市/神戸市西区 出原 甚五郎

私は今年 7 月に百歳を迎えました。5人兄弟の末っ子として大正9年(1920 年)7月18日大阪府和泉市(現)で生まれました。母は結核にかかり私が2歳の時に亡くなりましたので、母親の顔は覚えていません。ただ、結核に感染しないように襖越しに歌ってくれた子守歌(天満の子守唄)が唯一の母親の記憶です。戦後結婚して 1 男 3 女を授かり、80 代半ばまで味噌・こうじ職人として働いてきました。

今は老健施設に 3 か月入所し、後の 3 か月は自宅で介護されている生活を繰り返し送っています。長女が神戸市西区の西神ニュータウンに住んでいて、娘の家で自宅介護の多くの期間を過ごしています。4 人の子育てが無事にできたのは、戦争で片目を失わないその後の人生の不自由さと引き換えの傷痍軍人恩給を受給できたことが大きいと思います。

### 軍隊生活の始まり

私は S15 年(1940 年)12 月に軍隊に召集され、大阪の第 37 連隊に配属されました。翌

年 S16 年(1941 年)3 月に中支(江西省南昌市)に派遣されました。中国の部隊では第 34 師団の樁部隊(当時は機密事項で部隊名は草木の名前が付けられていた)→歩兵部隊に配属(中国での最前線部隊)。同年兵は 43 人。日本では S15 年に李香蘭が歌った「蘇州夜曲」が大流行しました。歌詞をしっかりと記憶して中国に行きました。部隊で歌う機会があり、皆の前で歌うと涙を流して喜んでくれ、もう一回、もう一回と要求された思い出があります。



(写真:S16 年 11 月、大隊本部での 1 俵の俵を持ち続ける競技で優勝した様子)

### 私の経験した戦場の様子

私達はかなり奥地へ進撃していましたので、戦いはほとんど山岳戦でした。相手が陣地を造って待ち構えているところを攻撃するのですから、どうしても味方の犠牲者が多く出るのが当然です。亡くなった戦友の屍をねんごろに葬ってやることも出来ず、戦友の片方の腕を切り取り、戦闘の合間を見つけては、それを焼いて骨を拾っては缶詰の空き缶などに納めて紐で首にかけて、また進撃を続けなければなりませんでした。

このようにして戦闘をしていますと、だんだんに隊の人員が少なくなるため、補充を受けなければなりません。私たちの部隊も度々補充を受けました。ある日の戦いの時でした。愛知県出身の兵士で(この人は補充で送られてきたのですが)敵の弾丸に当たって倒れ、うーん、うーんとうめき声をあげ、「助けてくれ!」と叫ぶのですが、激しく撃ってくる敵弾のためにどうすることも出来ず、弾丸が止むのを待って安全な所へ引きずっていきましたが、腹に二発もの弾丸を受け、顔は青ざ

め、物を言う気力もなくなっていました。胸のあたりにしきりに手をやるので、胸が苦しいのだろうと思い、釦をちぎって胸を開けてやってもまだ胸を手探しするので、胸のポケットに何か入っているかもしれないと思い、調べてみると、汗にまみれた折り畳みの皮財布が出てきました。開いてみると、子供を抱いた奥さんの写真がありました。「これだ!」と思い、顔に近づけると、苦しいながらもその写真を両手でしっかり握りしめ、何か言いたいようでしたが、声になりません。もう助からぬ自分を知り、最後に妻と子に別れを告げたのでしょう。程なくこの兵士は息絶えてしまいました。

戦地に来て間もない彼は、戦闘に慣れていないこともありましたが、戦争というのは無残であり、無情です。

私が目を負傷した時の様子

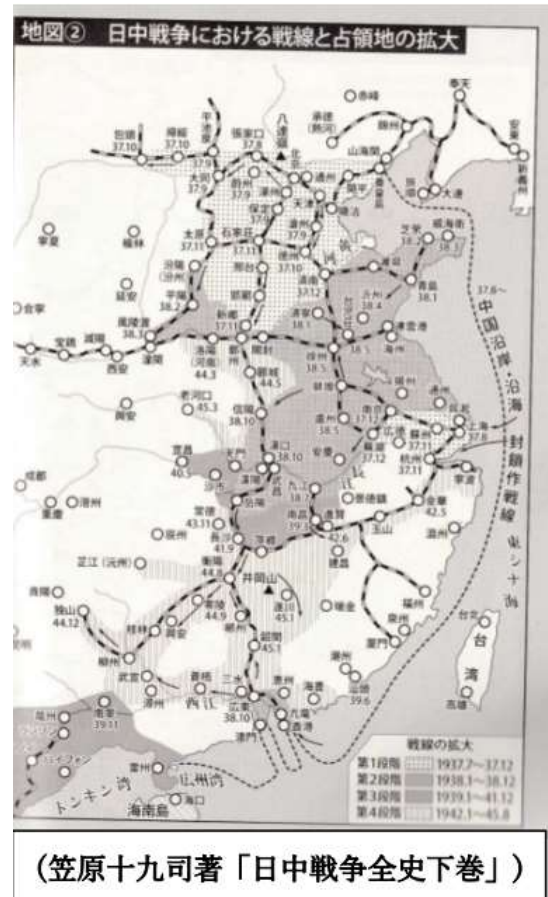
S19年(1944年)年6月6日のことです。山岳戦をしている時です。夜の明ける前の事でしたが、小高い山を登り切った時突然一群の敵兵とぶつ

かりました。突然ぶつかったので銃撃戦にならず、手榴弾戦となり、無数に投げてきた敵の手榴弾の破片が、私の左目に当たり、目の玉が2センチほど飛び出していました。消毒ガーゼを取り出して、飛び出した目玉を自分で押し込んで、なおも片手で手榴弾を投げながら応戦しました。やがて、味方の援軍が来て敵が山の下の方に退いたので安心したものの、出血がひどいためか気を失い、中国人の苦力(クーリー)に担架で運ばれたようです。敵が迫撃砲で攻撃したので、苦力たちは私を担架において逃げ去っていました。

気が付いたのは、はっきりしませんが2~3時間後でしたが、自然薯の蔓を見つけて食べることが出来、喉を潤すことが出来ました。担架の棒を掴んで意識朦朧として原隊を探してさ迷い歩いていると道の分岐点に来ました。その時に母親が歌ってくれていた子守唄が聞こえてきたように思えて、その声が聞こえる方へ歩いていくと、

日本語の話し声が聞こえ、近寄って行くと運よく原隊に戻ることが出来ました。私の姿を見た味方の兵士からは、顔面血だらけ、衣服はズタズタで、「出原は幽霊みたいであった」と言われました。私は負傷をしたので、戦場から後方の野戦病院へ送られ、そこで軍医が麻酔もなしに左眼を摘出しました。私の体は6人の兵隊と1人の看護婦に押さえ付けられましたが、余りの痛みに兵士たちを皆跳ね飛ばしました。その後手術が終わりました。

負傷した戦友たちの状況



(笠原十九司著「日中戦争全史下巻」)

負傷兵の中に地雷で顔面を負傷して顔全体を包帯した兵士がおりました。両眼を失明しているようなのと、傷が痛むのか、大声で「おーい誰か早く俺を殺してくれ！」「目が全然見えないし、死んだ方がましだ」とわめいたりしました。

彼は栃木県の人で、私と同年の人で鈴木一夫さんと言いました。やがて、私と鈴木さんとは内地還送となり堺市の金岡病院の眼科病棟に収容されました。彼の住所を聞き、代筆で栃木の実家へ金岡病院にいることを知らせました。私は、彼の負傷した内容はあまりにも気の毒でそのことを記しませんでした。三日後に母親と妹の二人が面会に駆け付け、病室の入り口で、あわただしく大声で「鈴木一夫はこの部屋でしょうか」と聞く声がありました。この時、ベッドに横たわっていた鈴木さんは「あっ、お母さんや」とびっくりするような声で叫びました。その声に母親と妹がかけより、鈴木さんの顔を見て、「おまえは、本当に一夫かい…」と問いかけました。地雷の破片と小石のために皮膚が破られ、顔の相が変わっていたためでしょう。「お母さん、こんな顔になってしまったよ」と母親にしがみつけば、「それじゃお前全然見えないのかい」と顔を抱きしめてむせび泣く母と子の姿に、病室の皆がすすり泣く有様でした。

#### 内地還送になった経過

私のいところが H 少将(大阪市出身)のサイドカーの運転手をしていて、そのいところが私の負傷を知って野戦病院へ見舞いに来てくれました。その時少将も一緒に同行し、私とは初めて対面しました。その後 H 少将が野戦病院の従軍看護婦の M さんに「負傷した出原を連れて内地還送する任務を与える。出原を堺市にある大阪陸軍病院金岡分院まで送り届けた後は、M は任務解除となり原隊に復帰しなくて良い」との命令を出して、M 看護婦と共に大阪堺市にある陸軍病院へ行き入院をしました。H 少将が一兵士の内地還送にこのような命令を出すことは珍しいことで、何か他の目的を M 看護婦に託す口実ではなかったかと私は推測しています。

S19 年 12 月現役免除になり、その後東京の病院で義眼を入れてもらい、S20 年 2 月自宅に帰り、S20 年 8 月終戦を自宅で迎えました。

私は戦闘で片目を失ったことで日本に帰還出来ました。それゆえその後の人生で、負傷した6月6日が私の新たな誕生日と考えるようになりました。

#### 日本傷痍軍人会の解散

先の戦争で後遺障害を抱えた元兵士の人たちが作っていた日本傷痍軍人会が 2013 年 11 月 30 日に解散しました。会員の減少と高齢化で運営が難しくなったためです。かつて 35 万人いました。

会員が減ってきたことは戦後日本が傷痍軍人を生まなかった証です。最後の会長奥野義章さんが、「戦争がなくて平和が続いたから、その結果です」と述べました。

「およそ戦争は、権力者が始めて、若者がかりだされる。反戦の川柳人で知られる鶴彬(つるあきら)に<万歳と上げて行った手を大陸において来た>がある。腕を失った帰還兵であろう。名誉の戦死も負傷も、若い肉体の痛切な悲劇に他ならない。」(朝日新聞「天声人語」2013 年 12 月 1 日)。

二度と私のような傷痍軍人を生まないためにも、憲法 9 条を護り平和な日本を維持して欲しいと思います。(2020 年 8 月)

出原様は 2021 年 1 月にお亡くなりになりましたが、本冊子に体験記が掲載されたことをとても喜んでおられましたご冥福をお祈り申し上げます。

### 神戸大空襲の記憶 (2021.7)

春日台 川端 泰子

私は昭和 10 年(1935 年)12 月生まれで現在 84 歳。終戦当時は西須磨国民学校(西須磨小学校)4 年生で須磨区稲葉町 3 丁目に住んでいた。

昭和 20 年3月 17 日の大空襲の時、須磨海岸に避難することになっていたが、我家では妹3歳がはしかに罹っていたので逃げられなかった。冬ふとんを被って弟(小1)とふとんの中に。目と耳を指で押さえ、目玉が飛び出さないように耳の鼓膜が破れないようにと伏せの姿勢でふとんの中で過ぎるのを待った。時々、廊下のガラス戸の外を見ると空が真赤、母は妹をねんねこで負って廊下を往ったり来たりしていた。そのあたりの家は焼けずに残ったが、神戸駅近くの祖父(母の実家)の家や伯父(父の実家)、神戸の親戚のほとんどは焼け出され、命からがら須磨の我家に歩いてたどり着いたのを憶えている。

その後、すぐ近くに須磨電話局があったので、類焼を防ぐためその周辺の家には立ち退きの命令。我が家にも建物疎開のシールが門に張られ、1週間か10日後?に立ち退きを命じられる。前年12月に父が病死しており、急に言われても行先もなく、月見山の親戚が疎開しておられたY家を紹介してくださり、Y家に母と子供3人の4人が泊めていただくことになる。家財は稲葉町の方に預かっていた。

その後、離宮前町に、疎開されて空き家になって家を見つけ、大八車で人間と家財を引き取る。5月頃、西須磨国民学校は閉鎖され、区役所になっていたと思う。1年生の弟は学童疎開で、岡山県赤磐郡高陽村の天理教の教会へ。私は4月～6月途中まで、垂水におられた稲葉町の隣保の S さん(子供さん達は田舎へ疎開、ご主人(小学校教師)と奥さんだけだった)宅から垂水国民学校へ通う。空襲警報が鳴ると学校からSさん宅へ帰り、叔母さんと近所の方々と一緒に逃げた。通学の途中でも空襲になり、滝の茶屋付近で電車が止まったことがあった。

2回目の大空襲が6月7日にあり、須磨の一带は全焼。稲葉町もこの間まで泊めていただいた月見山町のあたりも焼けた。この空襲で今まで助けてくださったHA家のおじさんは防空壕の入口あたりで即死。おばさんは大けがで壕から這って出てきておられた。山の手にある家なので、南から山の方へ逃げてくる人を壕にいられてあげていたのも、おじさんは入り口近くで気の毒なことでした。もちろん、家は全焼し、蔵だけが残り、その後、おばさんは蔵で生活された。

不思議なことに引越してきた離宮前町は焼け残り、稲葉町の家財を預かっていたHIさん(ご主人は出征中)の奥さんと男の子が我家の2階へ同居となった。空襲の時、大勢の方が亡くな

られ、亡くなられた遺体は地面に置かれ、娘さんを失ったお母さんが「末期の水をあげたい」と泣いておられたのを今も憶えている。死者は須磨の北、多井畑の間の青山でダビに付された。当時、防空壕は庭や家の中の床板を上げ、座敷の下に掘っていたが、家の中の壕に入っていたら焼死するだけで、「防火用水」が隣保に1つとかあったが空襲には何も役に立たなかった。

空襲は米軍爆撃機B29が高度1万メートルのところから爆弾や焼夷弾を落とすので、日本軍が下から高射砲で打つのですが全然届かない。何もできない、あきらめ。赤く染まった空に影絵のように見えた。又、戦闘機が低空飛行で兵士の顔が見えそうなくらいまで降りくるP51(と言っていたと思う)は機銃操作でバリバリと。入っていた壕の上の土中へ弾が刺さっていたことがある。何度も空襲があった。

6月の空襲のあと、だんだん追い詰められて、私は離宮前町の家に母と3歳の妹を残して祖父の姉の嫁ぎ先の大阪府中河内郡高安村に疎開(6月～9月)。母は当時33歳でした。戦争は熾烈となり、母と妹は須磨に居られなくなり、焼夷弾が落ちて消火できなかつたらいけないからと施錠せず、母の弟(叔父)と3人で河内へ逃げてきた。大阪まで省線(電車)。あと東へ行くトラックに頼んだ。人数制限で2人しか乗せてもらえなかったそうです。その時、一人の方が降りてくださって3人そろってこられたそうです。「もうその人を拝んだ」と母は話していました。夜中に歩いて、妹は叔父に肩車してもらって、たどり着き、終戦まで居たと思う。私は9月まで高安小に通わせていただく。

教育も隣保の組織も恐ろしいです。当時ラジオは政府からの放送で負けていても「帝国海軍は敵艦〇隻撃沈」とかの放送で信じていた。学校も開戦記念日の8日が来ると全員で並んで「天神さん」へ「武運長久」を祈りに詣っていた。家の門に習字で「撃ちて止まむ」「米英撃滅」を半紙に書いて張り出しをしていた。神風が吹くと言われていた。国民全てが同じ方を向かされ疑問に思わなかった。隣保の組織でも金属の供出、飛行機に使うダイヤモンドの供出(これは大丸へ持っていった。終戦後は日銀本店にまとめてあったそうです)。ミシンの有無(お国のためのものを縫うため)などがあった。

弟は私のあと学童疎開から帰った。頬が痩せていましたが元気で帰り嬉しかった。1年生でよく頑張ったと思います。弟は大人になっても桃は食べなかった。岡山で桃しか食するものなかった時があったそうで、先生のご苦労が伺えます。私の小学校の友達も何人も亡くなった。先生に道であった時「生きていたの」と言ってもらった。

思いつくままに記しました。神戸の片隅で小さかった私が見聞したことだけで狭いことです。



でも、もう半年早く戦争が終わっていたら、沖縄も原爆も各地の大空襲もなく、亡くなる方も少なく、くい止められたととても残念に思います。このようなことが二度と起こらない様に、私たちはどうすべきかよく考えなくてはと思います。

それから、母のすぐの弟はボルネオで特攻隊で戦死。妻は 102 歳で 2020 年に永眠しました。

終戦がもっと早ければ・・・ (2021.10)

北浦 隆(美多賀台)

私は昭和 6 年 10 月 1 日(1931 年)、神戸市長田区若松町で生まれた。現在は 88 歳なので、終戦時は高等国民学校 2 年生(14 歳)だった。戦争の体験と言えば、6 歳上の兄が昭和 20 年 5 月 22 日に召集され、熊本に配属となり、そこで「戦死」したことだ。戦争が早く終わっておれば死なずに済んだのにと悔やまれてならない。当時の戦犯たちの罪を憎む。

私の家族は両親、兄と私の 4 人家族で、家業は喫茶店だった。ここでの出来事だったが、昭和18年に 2 人のお客さんがいた。そこに警察官が来て「ひなかにコーヒ飲んでいるとはけしからん」と言って、手錠をかけ、引っ張って行った。この時の印象は強烈だった。このころには材料も入らなくなったので、父親は店をたたんで、ヤミ米の仕事をし始めた。母と私は三田市まで神有電鉄に乗って米の買い出し。三田駅から 16 キロ歩いて、2斗(30kg)の米を買い、父親がそれを売っていた。兄は県庁に勤めながら、北区にあった工業高校の夜学に通っていたので、母親が買い出しに行けない時は私一人で行った。ヤミ米なので、三田駅で汽車待ちの時、警察に見つかって没収。また、湊川駅でも没収。2回の被害にあった。子供だったので、怒られただけだった。また、湊川駅だったが、そこで捕虜のアメリカ兵(近くの川崎航空で働かされていた)が電車に乗り込むとき、日本兵が木刀でたたいていたのが痛ましかった。アメリカ兵とのもう一つの思い出は、遠足で長田駅付近を通っていた時、捕虜のアメリカ兵の集団に出会ったが、ある友達が「捕虜さん、握手して！」と言った。鬼畜米英と教えられている敵に対して、そのような態度をとったことで皆はびっくりした。米兵は笑いながら握手していた。今から思うと、大した友達だったと思う。その時、先生は何も言わなかった。

昭和19年4月に高等国民学校に入学したが、勤労奉仕だけで授業はなかった。近くの川崎航空の工場(今の兵庫区)に行くが、そこでは空冷のエンジンに穴をあける個所にマークする仕事であった。エンジンが2日に1個しか来ないので、暇で暇で仕方がなかった。しかしそこに行くと昼ご飯をしっかりと食べさせてくれるので、行くのが楽しみであった。

昭和20年になると各地の空襲の話がよく聞かれた。神戸では3月17日に空襲があり、兄と私は大橋9丁目の南側の海に逃げた。両親は別のところに逃げた。一家全員が死ぬのを避けるため別々に逃げるようになっていた。空襲解除後、周辺では火事になっていた。隣保では、焼夷弾による火事に備えて、防火用水からのバケツリレーの訓練をしていたが、どうして焼夷弾が降り注ぐ中で、バケツリレーができるのか！また、隣保で家の前や近くに防空壕を作っていたが、中に入ったら丸焼けになるということで誰も利用しなかった。



空襲から数日後、近くの神戸工業学校に死体が積まれているとのことで、恐る恐る見に行った。すでに死体は片付けられていたが、一人の女学生の死体だけが残っていた。あとから運び込まれたのかもしれないが、本当にかわいそうだった。私の家の向かいの人は「これでは日本は負ける」と言ったのを近所の新聞配達所の人が神戸の憲兵隊に密告した。その向かいの人は憲兵に連行されて、そして死んで帰って来た。家族が体をきれいに拭いていたら身体中にあざが数か所あったので、殴り殺されたと言っていた。

高等国民学校の2年生になったが勤労奉仕は家から直接工場なので、学校には行かなかった。5月22日に兄に召集令状が来た。一旦は大阪に行って、熊本に行ったが、近くに鉄道がとおっているのので、通過する時間が分かっておれば、汽車での別れが出来たのに・・・。

三田市の親戚の家も家族が召集されて、人手が少なくなったので、両親と私はそちらに疎開も兼ねて農業の手伝いに行った。疎開先には新聞、ラジオもなかったのので、終戦のことを知ったのは、少し後だった。

終戦になって、神戸に戻った時、電気が気兼ねなくつけられたことと爆弾が落ちてこないということとでうれしかった。

兄が熊本に行ったのは、沖縄戦の後はアメリカ軍が九州上陸する理由からか。そこで爆撃にあって「戦死」。戦死の報を受けたのは、9月中頃だった。いい兄だったのに本当に悔しい。

7月26日のポツダム宣言を受諾してすぐ戦争をやめておけば、原爆投下はなく、25万人は死なずに済んだ。これはアメリカの責任ではなく日本の軍部・政府の責任だ。東条英機首相と岸信介大臣は極悪人だ。その孫の安倍晋三もその血を引き継ぎ、日本を戦争に引き込もうとしている。戦争



は「戦い」ではなく「人殺し」だ。憲法 9 条をしっかりと守り、世界に広げていかなければならないと思う。

兄の「軍隊手帳」からの書き写し

「ご両親様 長らくご無沙汰して居ります。色々と長い事御世話に成りました。何の孝行も致しませぬ申し訳ありません。無事入隊し軍務に御奉仕致しています故、御安心ください。近く〇〇方面へ出発の予定ですが、鬼畜米英壊滅へ元気で出発します。別に何も申し上げることはありません。只、自分は時の御召しを受け入隊した以上、大日本帝国軍人の一員として豊国護持の大任を全う致します覚であります。弟の隆も又時の御召しを受け入隊する事と思うが大日本帝国軍人の一員として自分と同じく大任を全うする様に望む。



ご両親様 ではどうか健在にてお暮し下さい。

昭和20年6月20日午前11時

ご両親様へ

遺書、遺髪、遺爪、を同封して本日、班長殿へ渡します。」

教科書の墨塗りをさせられて… (2022.2)

小机えつ子(美賀多台)

朝、集合場所から「さあ出発する」という頃になるとお腹が痛くなる。お腹を押さえてしゃがみこんで「お腹が痛い、お腹が痛い」とシクシク泣く。「仕様がないなあ。えっちゃん。今日はお休みね」とお姉さんたちが言う。このように、私の小学校一年生は学校に喜んで行けなかった。今の言葉では不登校ということになるのでしょうか。一年生の国語の教科書は「ススメ、ススメ、ハイタイサン」から始まっていたように思う。また、神武天皇から今上天皇までの歴代天皇の順位を間違えなく言えるように、毎日訓練していた。こんな学校生活が面白いはずがない。だから、よく無断早退もしていたようである。当時はガソリン不足のため、馬の引く馬車が活躍していた。無断早退すると、このような馬車に後ろから飛び乗り、乗せてもらっていた(無論、断りもなく)。荷台の上には後ろ向きに乗り、脚をブラブラさせながら過ぎ行く景色を眺めるのは楽しかった。馬車の御者は私を見て「どこの子や」と言うだけで見とがめもしなかった。また出会う人も何も聞かなかった。敗戦がそこまで迫っているときに、誰も子どもの行動をとがめだてしなかった。

ところで、私は姫路の奥の神崎町で昭和 11 年(1936 年)に生まれた。

私が小学校に入学したのは昭和 18 年 4 月。その 2 年前に大東亜戦争が始まり、昭和 17 年 4 月には米軍による日本本土への空爆が始まっていた。「この戦争は負け戦になることが分つていながら開始された戦争である」と密かに言われていた。

3 歳年長の姉の小学校入学時ですら、ランドセルが手に入らないと母が嘆いていたことを鮮明に覚えている。何とか入手できたようであるが、私の場合は何でも兵隊さん優先のため、食べ物にも不自由するほどの物資不足状態であり、とてもランドセルどころではなかっただろう。ピカピカの一年生とは縁のなかった時代であった。当時、私たち生徒は度々講堂に集められた。壇上で校長がうやうやしく天皇陛下の写真(御真影)を取り出してきて飾り、教育勅語を読み上げるのを生徒たちは直立不動でうつむきのまま(顔を上げるのは厳禁)聞く。冬などは、栄養不足のために鼻水を垂らしている子があり、時々すすり上げる音が響いていた。体の鍛錬と称して郊外活動があったが、ちょっと遠方の大きな神社に詣でて戦争必勝と兵隊さんの無事を祈ることであった。勉強も遊びも全て戦争の勝利の為にであった。

昭和 20 年 8 月 15 日敗戦。終戦ともいわれる。この日を境にしてあわただしく社会が変化してゆく。敗戦時、私は小学校 3 年生。担任の先生から呼び出しがあり、学校の一種の敗戦処理を手伝うことになった。まず、教室から戦前色を消すこと。その中で衝撃的だったのは教科書の不都合な所を墨でぬりつぶすことであった。先生の指示に従って、戦争を正当化し、美化したところや天皇を崇拜するようなところを筆で塗りつぶしていった。ページによっては何を書いているのかさっぱりわからなくなった。9 月から始まる 2 学期に使用する教科書全部だから大変な労力であった。昨日まで最も大切なもの、重要なものとされていたものが、一夜にして真実でない考え、平和を害する考え、不要なものとされて消されていった。私の手で消していった。私はまだ幼かったけれども、戦争前と戦争後の価値の大きな転換が起こるべくして起こったと理解できたから、このような作業を引き受けたのだと思う。と同時に「国家のやること」を冷静に見極める必要性を小学校 3 年生なりに理解できて、私のその後に影響を及ぼしたと思う。

わたしの時代には、中学校や高校では弁論大会がよく開催されていた。その時のテーマとして、私なりの戦争体験から反戦や戦争の原因と考えていた天皇制への批判を取り上げていた。

「黒塗り教科書」



「一億一心」 (2022.6)

小林清二(春日台)

朝鮮、台湾を手に入れた日本は、昭和 7 年に満州國を設立し、國際連盟を脱退して孤立化、帝國主義國家への道を突き進みます。

私は、相次ぐ戦争の真只中、昭和 9 年(1934 年)に、大阪市西区の江戸堀に生まれ、8 人兄弟の 4 番目で次男です。

昭和 14 年から 2 年間、江戸堀幼稚園へ通いました。ちょうど日中戦争が続いている時ですが、遠く離れた支那本土での戦争であり、内地の生活は食べるものも何の不自由もなく普通でした。幼稚園では天皇陛下の祖先、天照大神に始まる神の世から神武天皇の東征のお話まで聞かされ、天皇陛下の絶対性は私の中に染みついてしまいました。

昭和 15 年は初代の天皇・神武天皇が即位されて二千六百年になり、2 月 11 日を紀元節として華々しくお祝いしました。

金鷄輝く日本の 榮えある 光身に受けて 今こそ祝えこの朝  
紀元は二千六百年 嗚呼一億の胸は鳴る

朝鮮・台湾を合わせた人口が 1 億人となり、「皇紀二千六百年、一億一心、大東亜共栄圏の確立」が始まりました。

支那では強い抵抗が起こり、泥沼の戦争が続きます。私たちは、支那の抗日戦士を匪賊と呼んで、皇軍が匪賊を討伐すると言っていました。

昭和 16 年(1941 年)に小学校が廃止され、国民学校が誕生し、私たちはその一期生です。そこには修身という科目があり、忠君愛國の思想が徹底的に叩き込まれました。修身では古くは楠木正成、新しくは日露戦争の乃木大将や爆弾三勇士など皇國の御為に命を捧げて戦った人の話が大部分を占めていました。また、教育勅語が重視され、皆が暗記させられました。その教えは、「親に孝行、すべての國民の親である天皇陛下の御為には命を捧げて戦え」でした。

海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍  
大君の 辺にこそ死なめ 顧りみはせじ

この年の 12 月 8 日、大日本帝國はアメリカに宣戦布告し、ハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、米國太平洋艦隊をせん滅する大戦果をあげました。ラジオから流れる軍艦マーチとともに始まる大本營発表に日本國民全てが歓喜し、大東亜戦争の勝利を確信し、大東亜共栄圏の確立のため、新たな戦争に向かいました。

昭和 17 年半ばまでは連勝、連勝でインド支那半島から南太平洋まで占領しています。

しかし、「勝った、勝った」と言っているのに、いつまでたっても戦争は終わりません。「撃ちてし已まむ、鬼畜米英」のスローガンで戦意の昂揚が強まります。

昭和 17 年半ばを過ぎると、兵器を作る材料が不足し、金属(鉄、銅、アルミなど)徴集が行われ、お寺の釣鐘や銅像なども持ち去られ、一般家庭からも鍋、釜類の供出が求められました。近くの空き地には防空壕が多数作られ、隣組では防火訓練の水バケツリレーが実施されました。子供も大人も布製の防空頭巾を作って常時携帯することになりました。防空頭巾、着物の胸には住所氏名を記した名札をつけ、女の人はモンペを穿き、男は丸坊主になり国民服に戦闘帽、足にはゲートルです。

やがて、食糧衣類が配給制となり、ご飯が麦飯となって少ししかたべられなくなりました。お米の少ない雑炊と団子汁まで食べていました。毎日使っていた運動靴も買えなくなり、当時は普段の生活が全て下駄ばきでしたが、トンボ釣りや探偵ゴッコなどみんな裸足はだしで歩き走り回っていました(学校の運動会は 1 年生の時が最後で、野球などのスポーツも全て姿を消していました)。さらに、お菓子類も全て無くなり、菓子パンやキャラメル、紙芝居のアメもありません。家庭には砂糖がなくなり、甘いものは何もありませんでした。

学校では「お米はお百姓さんの血と汗の結晶である」として、一粒のお米も決して無駄にしてはならぬと教えられました。

「欲しがりません、勝つまでは」は私達少國民の合言葉でした。戦局が悪化したのか、徴兵基準が強化され、私の周辺には、若い男の人が皆んな出征して居なくなりました。私の叔父は身体が弱く、丙種不合格で兵役免除だったのですが、この時には出征し、従兄弟の大学生も学徒動員で出征していきました。

昭和 17 年には、私の兄が中学 3 年生で志願して予科練(海軍航空隊予科練習生)に入隊しました。「一億総兵士」となりました。(母が死に行く息子を必死になって思いとどまらせていたのを私は見えています。また、父は人の道教団(現 PL 教団)の信徒代表だったため、不敬罪として 1 ヶ月間、投獄されました)



(坊主になった父親)

出征する人には必ず、武運長久を願って「日の丸の旗への寄せ書き」「千人針」を持たせることが、家族が出来るただ一つのことでした。出征当日は、国鉄の大阪駅のプラットフォームまで皆で見送りに行き、万歳三唱、七唱して、最後のお別れをしました。大阪駅のプラットフォームには何回も行きましたが、いつも出征兵士の見送りで 万歳、万歳という声が満ち溢れていました。

昭和 19 年、4 年生になった時、国民学校の学童疎開が実施されました。集団疎開先は島根県と決まっていたが、私はこれには参加せず、母と兄弟 6 人で生駒山の西麓にある枚岡町に家を借り、縁故疎開として移り住むことになりました。枚岡東国民学校 4 年い組に転入し、若い男の先生と男女共学に驚きましたが、いじめも受けずに温かく受け入れてもらいました。枚岡の学校では、毎日運動場に全校生徒が集まる朝礼があり、校長先生が訓示をされます。この時に、真東を向いて皇居遙拝の一礼が行われました。私はここで初めて「気をつけ、歩め、右向け右、回れ右、前に進め」など軍隊式教練のようなものを受けました。江戸堀の学校とは全く違う厳しい教育でした。12 月 8 日は大詔奉戴日であり、官弊かんぺい大社枚岡神宮に戦勝祈願のため全校生徒が隊列を組み、太鼓を叩いて行進し、お参りをしました。

この頃、私は天皇陛下に命を捧げて戦うため、海軍兵学校入学を決意しました。

翌年、昭和 20 年 3 月 13 日の深夜、大阪大空襲がありました。枚岡には空襲はないと決めて皆で大阪の空を見ていました。B29 の大編隊が超高空を飛来し、大阪のあちらこちらから何本ものサーチライトを照らして B29 の機影を捕え、高射砲がバンバンと発射されますが、全然届きません。B29 は焼夷弾を大量に投下しました。やがて火の手が上がり、あっという間に全面が火の海です。暗闇の中で、見渡す限り、もくもくと燃え上がる恐ろしい光景に震え上がりました。父や姉、祖母がその中にいるのです。しばらくして燃え上がった灰がパラパラと空から降ってきました。

翌日、母と江戸堀へ行きましたが、肥後橋を経て江戸堀に至る大阪の町は一面の焼け野原となっていて、唯一ポツンと残っていたのは土蔵の倉だけでした。私の家も完全に燃え尽きていました。父たち 3 人は中之島が燃えていないので、そこへ逃げると伝え回る方がおられたそうで、命拾いしました。

4 月には 5 年生となり、担任は若い女の先生でしたが、大変なことを教えられました。「アメリカ兵は鬼であり畜生だから絶対に降参してはならない。大男のアメリカ兵でも急所である金玉を一撃すれば倒せる」と死んでも闘えと教えられました。「一億一心」が「一億火の玉」となり、とうとう「一億玉砕」になってしまいました。

8 月 15 日、天皇陛下の玉音放送が行われました。私も父、母、近所の人達と一緒にこの放送を聞きましたが、何のことかわかりません。父も母も無言です。ただ一人、近所の中学生のお兄さんが「戦争は終わった、万歳」と叫んでいました。



蓋の裏に「陸昭一八」の銘がある飯盒

人の命を粗末に扱う実に理不尽な世を生きてきた私は、戦争を放棄した日本国憲法第九條は何よりも大切なものと考えています。

父は必ず帰ってくると・・・ (2022.4)

白井 博美(伊川谷町)

父は昭和 13 年支那事変(日中戦争)に出征し、無事帰還しました。間もなく第二次世界大戦へと出征し、昭和 20 年 2 月 14 日ルソン島で戦死しました。終戦時、私は小学一年生の 7 歳でした。

戦後 75 年経過し、幼少の頃のわずかな記憶と戦地から届いた父の書簡、母の残した少しのメモ、戦友会の方々による資料を基に、当時を振り返ってみたいと思います。

当時私は、父母妹と私の四人家族で日本海の海の見渡せる城崎に住んでいました。教師として公務に多忙な父でしたが、休日には自転車の荷台に乗せてもらって、あちこち行ったのを覚えていません。

(父の出征)

昭和 19 年 6 月福井県小浜市の父の実家より「アカガミキタ、スグ、ジュンピサレタシ」の電報が届きました(召集令状は本籍地に届く)。両親の出征に向けての準備が始まりました。父は教え子を残して出征するため毎夜遅くまで残務整理、母は出征に必要な物の調達、特に千人針を集めること、これは「虎は千里行って千里帰る」の言い伝えにちなみ、戦地に向かう兵士の無事帰還を願い、白い布に赤い糸で「一人一針」の玉止めを作り(寅年生まれの人には十針できる)、千玉集めるのに一軒一軒家庭を訪問したり、道行く人をお願いしたり、駅に行き汽車に乗り降りする人をお願いしたり奮闘しました。その時の母の心中は、千人針を身に着けて「必ず生きて帰ってほしい」と藁をもすがる思いだったのでしょうか。最後に写真館に家族写真を撮りに行きました。この写真は後の父の遺影となりました。出征時の持ち物の中には、家族の写真や家族の毛髪などそっと忍ばせたようです。

昭和 19 年 6 月 19 日出発の日、大勢の人々による壮行会が行われました。この日赤飯を炊き沢山のご馳走を作り、母は白い割烹着姿で、ふるまい酒を注いで回り見送りの人々の「おめでとうございます」の言葉に応え、今思えば気丈に振舞っていたように思います。♪~かってくるぞと いさましく~♪ の軍歌と「バンザイ!」「バンザイ!」の歓声一色で見送られ出征しました。私は、父の乗った汽車が見えなくなるまで手を振り見送りました。見送り後の母の涙は今も私の心に残っています。



(出征旗5m)

6月21日京都より父の第一報が入りました。「出動、出動で部隊は大混乱、書簡は当面不可、面会は先ずない、激戦地へ行くか残るか分からない、まずはインパールを思えば間違いなく激戦地へ行く。生命保険に加入して置くこと」と、記され当時の総動員の出兵の様子が伺えます。

7月に入ると突然面会の通知があり、下関へ向かいました。人！ひと！の波で埋まりそうな駅舎を過ぎると、広い公園へたどり着き、大勢の兵士の中で父の姿を見つけることができました。父との再会でした。おにぎりを一緒に食べ、抱っこしてもらったことを覚えています。30分位すると港への移動が始まり、父は大きな黒い船に乗船しましたが、大勢の兵士の人々のなか父の姿を見失いました。年配そうな兵士の方が「お嬢ちゃん、右の方に向かって大きく手を振ってごらん」と、言われるままに大きく手を振り、目を皿のように父の姿を探し求めたその時かすかに父の姿を見つけたように思いました。船は沈まんばかりの兵士を乗せ、下関港を出発しました。これが父との別れになりました。

8月1日のカタカナで書かれた書簡には台湾の消印が押され台湾に渡った様子でした。この書簡を第一報とし計26通の検閲済の航空便が(40銭の葉書)届き、部隊のこと、家族や子供の心配なことなど細かく記され、12月には「壊れた時計のようにちぐはぐ、どこに行くかわからない、次の便りができるのを祈りながら別れる」の便りを最後に、次の書簡は届くことはありませんでした。どこへ出兵したのかわかりませんが、たぶんルソン島に向かったのでしょうか。戦友会の方によると、最後にルソン島に集結し激戦の様子が語られました。

#### (戦中・戦後の暮らし)

居住していた城崎より父の実家の福井県小浜市へ向かう途中、京都府舞鶴駅で乗換えまち時間中、“空襲警報発令”で誘導されるまま一目散に防空壕へ逃げ込みました。真っ暗で何が何だかさっぱり分らず奥へ奥へ逃げ込みました。真っ暗な防空壕の中、爆弾らしき大きな音、かすかに漏れる光、子供の泣き声と悲鳴、私はただ防空頭巾にうずくまるばかりでした。空襲警報解除になり入り口に近づくと血まみれになっている人を目にしました。どれくらいの時間の経過かわかりませんが、外はどんより夕暮れのようなようでした。防空壕の入り口には「大勢の人が寝ている」と7歳の私はそう思ったのですが、大勢の人が倒れてなくなっていました。その人たちをかき分け踏みつけながら更に外へ進むと、鼻を突くような臭いと同時に目にしたのは、血だらけの人、腕がなくなっている人、亡くなって倒れている母親の背中で赤ちゃんが泣き叫んでいる様子、ぐったりしている赤ちゃんを抱きかかえ呆然としている母親、ぐったり倒れている人々、悲惨な光景が目に入りあちこちで煙が上がっていました。震える足に力を込めて長い時間歩き続けました。この時の恐怖は75年たった今もよみがえります。舞鶴港は軍港だったため、空襲が激しかったと後から聞きました。



(台湾からの軍事郵便)  
(小学生のためカタカナ文)

日々の生活のなかでは、窓ガラスは割れないように紙を張り巡らし、電球は光が漏れないように黒い布で覆い薄暗い中で身を寄せ、夜はもんぺに上着、靴下も履いた普段着のまま布団に入り、リュックサックと防空頭巾は枕元に置き就寝していました。

昭和 20 年 4 月私は国民学校一年生になりました。紺のもんぺ姿に防空頭巾をかぶっての登校です。校門をくぐるとすぐ奉安殿に最敬礼し教室に入ります。「サイタサイタサクラノハナガサイタ」「ハイタイサンアリガトウ」「ニクイバイハイヨヤツツケルマデタタカオウ」(当時一年生はカタカタ音)などは、よく筆記しました。体育の時間には上級生に交じってバケツリレー、竹やりの練習をしました。まさに軍国少女の始まりです。空襲警報発令になれば、すぐ机の下に潜り込み、下校途中にB29 が飛べば防空壕の中に入り、防空壕から出る時間もわからず大人の迎えがあるまで防空壕の中に居ることは度々でした。

夏休み中の 8 月 15 日「大切なお言葉」との回覧に大人も子どももラジオの前に整列しましたが、7 歳の私には何を聞いたのかさっぱりわかりませんでした。母に聞くと「戦争が終わった、日本は負けた」の言葉、ほとんどの大人は泣いていました。私たち子どもは大喜びでした。私は、父が帰ってくる、電気がつけられる、B29 が来なくなる、防空壕に入らなくて良い、バケツリレーも竹やり練習もないなどなど。

二学期になり登校すると学校の様子が一変していました。奉安殿は取り壊され、教室の掲示物も全部撤去され、私たちの最初の作業は教科書の大半を墨で黒く塗りつぶすことでした。音楽の時間には兵士の帰りを待つ歌として創られた「しずかかなあ しずかかなあ」で始まる「里の秋」を習いました。

少しずつ平穏な日々を取り戻すなか秋近くなると兵士の方々の帰還が始まり「里の秋」を口ずさみながら父の帰りを待ちました。夕暮れになると「ザック、ザック」と軍靴の音が聞こえます。「兵隊さんが帰ってきた」足音です。帰還兵を待つ家は夕暮れになれば明々と明かりを灯し「ザック、ザック」の音に心ときめかせて耳を傾けます。「ザック、ザック」の音が近づくと居てもたってもおられず玄関近くに身を潜めて待つが足音は遠のいてしまう。次の日も次の日も待ち続けた。「里の秋」をたくさん歌って待ち続けた。「ザック、ザック」の聞こえる日がまばらになってきても、父は帰る、どこから帰るか分からないが必ず帰ると待ち続けた。毎日毎日待ち続けたが、とうとう我が家には「ザック、ザック」の音は立ち寄ることはなかった。

父の帰りを待ち続けながら二年生の夏休みを迎えた頃、同郷の同じ隊の方から父の戦死の訃報の知らせでした。死亡したのは「ルソン島リザール州モンタルバンマー山、北方マンゴ川、畔陣地」で昭和 20 年 2 月 14 日午前 5 時 右背後から左胸に貫通する敵の弾を受け死亡しました。父の遺品としての家族写真、時計、万年筆、遺髪など数点持ち帰る途中上官に没収され、何も



(父の遺言)



持ち帰ることが出来ず残念がられていました。

しばらくすると「遺骨の返還」の通知があり、舞鶴に遺骨引き取りに出向き、白木の箱を胸に母と帰宅しました。母はその時の様子を「白木の箱はとても軽かった」と、話していました。白木の箱の中は遺骨や遺髪など何もなく、父の名前が記された、紙切れ一枚入っていました。母は、父が出征前に残した写真や遺髪や万年筆など愛用の品々を数点忍ばせ葬儀・納骨しました。「紙切れ一枚で召集され紙切れ一枚で帰還した」と、母は口にしていました。後の戦友会の方はルソン島には「米兵の墓は白い墓標がたくさん並んでいるが、日本兵の犠牲者はそのまま眠っておられる」と聞きました。このことを思うと高齢になった今も胸の張り裂ける思いです。

#### (父の戦死後の私)

戦後の食糧難や生活の不安にも見舞われ、城崎から母の実家の愛媛県の小さな島に移住し、母は教師をしながら母子二人の生活が始まりました。大変封建制度の強い村でした、何をしても“片親”という偏見をもたれ、正月や村祭り等の祝い事には“片親の子どもは参加すると縁起が悪い”等と自粛を強いられる度に私は戦争を憎み、憤りを覚えました。楽しく過ごせるはずの少女時代もひっそりと過ごしました。

私の気持ちが大きく変化したのは、東京の大学に進学した夏、東京駅で手にした「戦争に反対したのは共産党だけ」のビラでした。私はこのビラに釘付けになりました。“戦争に反対した人もいたのだ！”いろいろ知りたい、との思いが強く学生集会に参加したり、図書館で調べたり学業の傍ら少しずつ平和運動へと歩み始めました。他界した母は、父の戦死を受け入れられなかったのか、当時の悲しみを思い出したくなかったのか、戦地からの書簡による悲惨さに耐えがたかったのか、戦争当時のことは“あまり話したくない”と言って語ろうとしませんでした。当時は小さな畑で自家栽培のさつまいも、大根、馬鈴薯、トウモロコシ、トマト、キュウリなどが主食糧になり、米麦も手に入らず芋粥を食べる日々が多く、毎日の食糧難でその日の暮らしが精一杯でした。

「戦争さえなければ！」「お父ちゃんが生きていてくれたらなあ！」と、母は時折口にしました。その母も晩年には「父が復員し、血だらけになって帰ってきた」夢をよく見たと言うようになり「総理大臣様、私の命はいつでも差し上げます。お願いです戦争をしないでください！孫やひ孫を戦争に連れて行かないでください」と、最後まで“戦争しないでください”と、言い続けながら 10 年前 98 歳で父のもとへ旅立ちました。

母の他界後戦地から書簡や出征時の遺書、戦友会の方の報告など何度も何度も読み返し、年を重ねるごとに、当時の戦地の悲惨な状況が顕になり、書簡を受け取った母の心情など怒りと悲しみが胸の内を去来します。

何も知らなかった私も 60 年前共産党の発行した一枚のビラで、より多くのことを学び、多くの人と出会い平和運動の大切さを実感しました。学生運動をはじめ安保闘争、若者の運動、子供を守る運動、婦人運動、戦争法反対運動、憲法 9 条を守る運動へと続けました。

一枚のビラで目覚めたように、一枚のビラを多くの人に届けることの大切さ、人との出会いを大切に、一人でも多くの人に真実を語り続けたいと思います。老いゆく人生、命ある限り憲法 9 条を守り続ける所存です

小学生から毎日が戦争の中に… (2021.12)

高島 照子(糀台)

昭和 9 年(1934 年)生まれの私は灘区の福住小学校に入学し、2 年生で楠国民学校に転校、そして終戦当時は疎開先の丸亀(香川県)の城西国民学校5年生(11 歳)でした。

1年生に入学した時は、まだ戦争の影響はなく、国語の教科書も「サイタ サイタ サクラガサイタ」というようなものでしたが、2~3ヶ月した頃、突然、教科書の内容がガラッと変わり「ハイタイサン、ゴク로우サン/ススメ ススメハイタイ ススメ」というようなものになりました。内容が急に変わったので、学校の先生も大変だったのではと思います。

学校生活はそのほとんどが戦争の時代。学校で遊んだりした記憶はありません。また学校では、みんなを持ち寄って千人針を作ったこと、隣保で兵隊さんを見送りに行ったことなどは何となく覚えていてます。

灘区に住んでいた頃の家族は、祖父(大工)と祖母(髪結いで、叔母2人の他にお弟子さんがたくさんいました)、父母、私と妹弟の3人で、母(大正3年生)は大家族の中で女中奉公のようにみんなの世話をして忙しく働いていました。父(明治41年生)は当初、建築(設計)の仕事をしていましたが、その後、職業軍人になり赴任地は鳴尾浜(西宮)の軍隊で少尉でした。終戦は西宮で迎え、戦地には行きませんでした。

〈集団疎開先で…〉

昭和 19 年、3年生の終わりに姫路の奥に集団疎開し、お寺の本堂で寝泊まりしました。おかずはおこころいしかなく、育ち盛りの私たちはいつもお腹をすかせて、ひもじい思いをしていました。母から竹の笹で梅干を包んだものをちよぼちよぼ吸いなさいと言われておやつにしていました。疎開先では学校から毎小学生から毎日、どこかの農家に作業の手伝いに行き、そこでイナゴを焼いて食べることを教わり、これもおやつにしたりしていました。

学校では都会から疎開してくる子供がたくさんいたため、1 クラス 60~70 人くらい詰め込まれ、とても勉強などできる状況ではありませんでした。

昭和 20 年 3 月 17 日の空襲があった日、神戸方面の空が真っ赤になっているのを、みんなで「どないしょう、どないしょう」とわんわん泣きながら見たことを今も鮮明に覚えています。空襲のちょうど1週間前に6年生が卒業式のため先に神戸へ帰っていたので、彼らの安否も気がかりでしたが、それっきりわかりませんでした。

この空襲後、家族全部で疎開するために神戸から母が迎えにきました。結局、集団疎開は1年ほどでした。



(学童疎開地での川遊び)

### 〈神戸空襲の時…〉

戦時中は大倉山の南側、楠公さんの北側の電車道に面した場所(現在の神戸市立中央体育館のあたり)に住んでいましたが、3月17日の空襲で家はまる焼けになりました。

その日、父は西宮にいたため、母は空襲の中を上(下の弟は戦後生まれ)を背負い、妹の手を引いて3人で今の灘区王子動物園の下に住んでいた叔母の家まで5kmほどを走って逃げました。無我夢中で気が付いたら着物はビシャビシャに濡れ、下駄は脱げて裸足になっていたそうです。そのあと母は1週間くらい寝込んだとのことでした。全焼した自宅跡には、寿しなどを入れていた大皿がポツンと1つだけ残っていました。焼けて色が変わっていましたが、母はこの皿を戦後何年かで割れてしまうまで大事に使っていました。

大倉山で町内会の近所の人たちと作っていた防空壕は、道路に出たところに地下道のようになっていました。一番大事なものをこおりに詰めて奥に置いていましたが、空襲の翌日、それを取りに行ったら、残り火?で突然火が出て焼けてしまい、2つのこおりだけをやっと取り出せたそうです。戦後、それに入れていた着物を売って生活の糧にしました。

### 〈神戸空襲被災、その後…〉

空襲で住む家がなくなってしまったため、家族(母と祖母、自分たち兄弟の3人、父の妹)で香川県丸亀市の母の兄のところに疎開しました。省線(今のJR)は、空襲で混乱した神戸駅から幼い子供を連れて西に向かうのは難しい状況だったため、一旦京都まで行き、そこから折り返して尾道まで行ってようやく四国行き(徳島線)の連絡船に乗ることができました。

叔父の家には同じ年頃のいとこが4人いましたが、彼らは、私たちが自分たちのご飯を食べているということで嫌な顔をしていたことを子ども心に覚えています。

終戦の玉音放送は疎開していた丸亀の国民学校の校庭で聞きましたが、何のことかよくわかりませんでした。家に帰って近所の人から聞いて、初めて戦争が終わったと知りました。

終戦後、田舎でも食糧事情がだんだん厳しくなってきたため叔父の家を出て、丸亀の商店街に家を探して移り住みました。

国民学校の次に高等小学校が2年間ありましたが、これは戦後新制中学校になり、中学と高校は丸亀の学校に通いました。ここでも1クラスは50~60人くらいでした。中学校ではソフトボール部に入り、3年くらいから学校生活が少し落ち着いてきたように思います。

早く神戸に帰りたかったのですが、高校卒業の時にようやく帰ることができました。神戸では焼け残った灘の叔母の家にしばらく住み、その後、神戸高校の下に家を探して、親子6人が4畳半一間で暮らし始めました。

高校卒業の昭和28年に、私は神戸市交通局にバスの車掌として就職しました。

どんな仕事を希望するかなどは思いもできません。働けるだけで、家族の生活が成り立つ、それだけで必死でした。皆がそんな感じでした。

仕事帰りに三宮の近辺を通ると、薄暗い中、進駐軍のアメリカ兵がたくさんうろついたり、客引きが出ていたりして気持ちが悪かったのを覚えています。仕事で第6突堤まで回るバス路線が

あり、その勤務が嫌でした。神戸港には軍艦も入っていました。また楠公さんの少し西より南側から新開地の手前までアメリカ軍のカマボコ兵舎が広がっていました。昔の新開地は映画館や芝居小屋が並び、遊園地もあって、母と一緒に遊びに行く楽しみで心が浮き立つ場所でした。その新開地も空襲でほとんど焼けてしまい、戦後、今のように変わってしまいました。



(乗車していた当時の市バス)

〈戦争の時代を生きて…〉

身内で出征した人や戦死した人はいませんでしたし、私自身は空襲を経験していませんが、小学校は3度変わり、私の子ども時代は毎日が戦争の中にあり、まともな勉強や子どもらしい遊びなどの思い出はありません。

子どもたちが二度とあのような暮らしを送る日が来ないように…戦火の中を逃げ惑うことのないように…あの時代を生きた私たちは、今の政治の有りように注意深く目を凝らしていかなければと思います。

42年間の在職中は労働組合運動の仲間とともに、そしてその後は 9 条の会などの活動を通じて、憲法を守り、平和を願っています。

\* (高島照子さんは 10 月 19 日にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りいたします)

「模擬爆弾(原爆パンプキン)も投下され…」 (2022.7)

高橋 壽(菟台)

私は生まれも育ちも京都府舞鶴(東地区)。

昔は軍国一色の町。今も基本的には同じ。満州事変の2年後、2・26 事件の3年前の 1933 年(昭和 8 年)生まれ。現在 87 歳。

東舞鶴の町は条里制で南北は 1~9 条、東西の町名には三笠、初瀬、八島、敷島など旧舞鶴海軍所属の軍艦名が付けられ現在も。これだけでも不愉快。敗戦までは軍人・軍属が主権者。戦後は米軍で現在は海上自衛隊基地の存在が大きい。

1940 年頃、小学校では優しいお兄さんの先生が 3 か月ほどの軍隊訓練から復帰したら、3 年生全員にビンタの嵐を加えるような先生に変化。これが太平洋戦争開始の 1 年前のことでした。私は朝鮮人の同級生と仲が良かったが、中学受験の時「朝鮮人の子は不合格、日本人は全員合格」と決まっているとの連絡があり、同級生の友人のことを想い、怒りを抑えられませんでした。

敗戦の年の春、中学校に入ると校長先生のほかに将校を含む 3 人の兵隊が常駐し、校長先生の存在感は薄れ、先生達も生徒に盛んに暴力を加えるとともに、上級生も下級生に理由もなく暴力を加える様になりました。その理由は天皇陛下の命令だからでした。

中学校での教育は軍事訓練最優先で、天皇のために死ぬのは当然との軍国主義教育が徹底し、私も軍国少年にされました。

「鬼畜米英」「打ちてし止まん」「滅私奉公」「欲しがりません勝つまでは」「戦争に負けたら男は断種される」「中国人・朝鮮人は動物と人間の中間的生物」「戦争が不利になったら神風が吹く」など教壇上で語られました。

私の父親は海軍工廠の職工でしたが、出勤すると 1 週間位泊まり込みで働らかされ、帰宅時には体じゅう 虱しらみだらけで肌着衣類全部を煮沸消毒するのがいつものことでした。

敗戦の年の 4 月、ある日突然、市内主要道路沿いの民家の各家に「5 日以内に立ち退け」のステッカーが貼られ、有無を言わず自らの家屋を破壊させられるよう自らの手で網をかけ倒している悲しい恐ろしい光景は、75 年経過した今も昨日のように記憶から消えません。

敗戦の年の 7 月 29 日、海軍工廠が米軍爆撃機に攻撃され、学徒動員生(師範学校、中学校、女学校、小學校生徒)約 200 人が死亡。模擬爆弾(原爆パンプキン)も練習に投下されましたが、この事件は市民の間で語られることは稀でした。私の父も戦後 4 年間、家族に語ることなく亡くなりました。これは戦時中の防諜法の影響の恐ろしさを示しています。



絵を描くことの好きな私は中学校で写生をしたくても山や建物を書くときスパイの疑いをかけられるので出来なかったこと、主な食料は軍隊にとられ、国民の胃袋には入らなかったのも、特に成長期の少年には空腹は辛かったこと、栄養失調で亡くなった先生も同級生も居たこと。これらは辛い記憶ばかりでした。

敗戦の詔書が出され、多くの方が宮城(=皇居)前広場で泣き伏している報道がありました。私は昭和天皇が戦争指導の責任者として自刃されるのを悲しんでゐるのかと思っていたら「人々は戦争に敗けて天皇陛下に申し訳ない」と泣いているとの解説、少年の私には驚きでした。

私たち昭和一桁生まれの少なくない人達は昭和天皇の戦争指導責任を許していないと思います。

私は 18 歳の春、舞鶴の町を去りました。

戦前・戦後もひもじさが… (2021.9)

西藤 富司江 (須磨区)

昭和8年(1933年)11月23日に横浜市で生まれ(現在86歳)。その後、父の実家の大津市に移り、昭和16年、8歳の時に神戸市須磨区に移転してきた。西須磨小学校(当時は西須磨国民学校)は都会の学校だったので児童も多く、しかも2部制だった。学校は戦争一色で、歌は軍歌で、女子はなぎなたの授業があった。先生は怖い存在で、日常的に暴力が振るわれていた。

兄は近所の子供たちと一緒に、近くのジャズで有名な小曾根邸と村野工業高校創設者の村野邸との間の広い道路でよく遊んでいた。父親は軍隊の検査では、肺の疾病があったので、兵役免除になった。その為、父親は世間体もあり、二つ違いの兄(靖邦)を昭和19年4月、熊本の航空乗員養成所に入所させた。

この頃は食料不足で、学校の校庭は畑になり、生徒も畑仕事をさせられた。また、食料品は全て配給制になり、ひもじかった。家の庭の一角に防空壕が掘られ、空襲の時には、いつもそこに避難した。3月17日の神戸大空襲では須磨の南の方面が爆撃を受けた。幸いこの付近は爆撃を免れたが、3月20日に近所の武庫離宮(今の離宮公園)の周辺に爆弾が投下され、大火事になった。この時の空襲はとても怖かった。母親が3月12日に妹を出産したが、3月17日や20日の空襲の時には逃げられず、死ぬ覚悟で家にいたとのこと。

空襲の頻度も増えたので、私たち国民学校6年生(12歳)は昭和20年4月から終戦後の11月まで、岡山県赤磐郡高陽村のお寺に学童疎開した。(学年毎に疎開先は違った)。疎開先に8ヶ月間いたが、乳飲み子を抱えた母親は一度も来てくれなかった。同級生は家族の訪問が時々あり、私は本当に寂しかった。また、食事はモモがご飯の代わりに、おやつは大豆20粒だったので、ひもじかったことを強烈に覚えている。食糧事情も悪かったからか赤痢にかかり、髪の毛の虱や蚤にも悩まされた。学童疎開では親元を離れての寂しさはひとしおで、我が子や孫には、そのような体験を絶対させたくない。

兄(88歳)から当時の話を聞くと、熊本養成所に入所したが、米軍が九州に上陸するだろうとのことで、すぐに新潟の養成所に移動して訓練を受けていたので、そこで終戦を迎えた。その間空襲もなく、冬は学校からスキーによく行ったりしてのんびりした養成所の生活だ



熊本航空乗員養成所 (兵庫県出身者)

ったとの事。しかし、8月20日に北陸本線から神戸に戻ってきたが、三宮に降りたら周辺は焼け野原で、兵庫のあたりでは、聚楽館の建物だけが残っていた。家に帰ると座布団の上に赤ん坊がいて、誰の子だろうかと思った。それが3月に生まれた妹だったとのこと。

終戦後も父親が失業したり等で大変だった。食糧難は戦前以上に大変で、須磨寺の沿道に闇市があったが、お金がないので買えず、戦前と違うひもじさだった。父親は遠くまで買い出しに行っていたが縁故もなく、何も買えずに帰ってくることもあった。ある買い出しで、玉ねぎしか手に入らず、来る日も来る日も玉ねぎが食卓に出て、それから数年玉ねぎを食べられなくなった。また、母親は着物を持って、須磨の北の多井畑の農家に野菜を買い出しに行っていた。おやつがぬか漬の野菜だった。

小学校卒業後、私立山手女学校に入学したが、経済的に厳しくて、高校は市立須磨高校に移ったが、学校を休学して、電気屋の事務の仕事に就いた。でも、どうしても、学校に戻りたくて、1年で復学したが、普通科でなく、家庭科で、年齢も1歳上で、友人もできず学校生活は楽しくなかった。

あの戦争では、戦前も戦後も大変な思いを大人も子どもも負わされ、我家での戦死者は無かったが、結果、弱い者にしわ寄せがくることを身をもって実感した。

あの時代に生まれた者として、“戦争は絶対ダメ”という思いは、今のきな臭い時代、更に強くしている。

戦争体験から戦後社会へ (2022.8)

馬場 功(竹の台)

敗戦のその日、私の一家は現在の北朝鮮の地にいた。場所は北朝鮮の首都、ピョンヤンを経て黄海に流れ込む大同江の河口に開いた港町、鎮南甫(現在は南甫と改名され、軍港となっている)。私は国民学校 3 年生で8歳。すでに異変は始まっていた。1945 年 4 月ごろから、旧満州に住んでいた日本人家族の妻子が、南下してくる旧ソ連軍の侵攻を逃れて日本へ帰国するため、鎮南甫へ集まっていたのである。

この人たちは、分散して日本人の家庭に2-3日宿泊し、その後、学校などの施設を利用して集団生活を送り、帰国の船便を待ったのであろうが、日本の近海は米軍潜水艦が跳りようし、日本軍も安全な航海を保証できず、また船舶も不足して確保できなかったのであろう。そのまま敗戦の日を迎え、この人たちは港湾の倉庫内に集団生活の場を移されて、極寒の冬を過ごさざるを得なくなった。それがどれほど厳しい冬だったか。詳しい事情は分からなかったが、小さな棺をかついで野辺の送りをする人々の姿を何度か目にして、胸を締め付けられる思いになった。

わが家の生活も敗戦の日を契機に一変した。日が暮れる頃になると表の通りに朝鮮の民衆が集まり始め、やがて口々に大声で叫びながら行進を開始した。怖くて外を見ることは出来ず、ことばが分からないので、何を叫んでいるかは理解できなかったが、日本からの解放を喜んでいるのは子供心にも伝わってきた。3 晩ほど行列は続いたろうか。2 日目の夜は数人の若者が屋内に侵入し、ラジオ、腕時計などめぼしい物を持ち去ったが、暴力をふるうことはなかった。ついで、父が逮捕され、母が「もう生きて日本に帰れない」と涙する姿を見て不安にかられたことを記憶している。

後で知ったことであるが、父には「差別主義者ではなかった」と証言する朝鮮人が出て、釈放された、とのことだった。やがて、家は接収され、同じ日本人の家の一間を借りて一家8人が帰国するまでの生活を続けた。父はその後、駐留してきたソ連軍と在留日本人の折衝役として日本人協会の会長を務めたが、その仕事の内容について何も語ることはなく、私も聞く機会を持たなかった。今にして残念だったと思っている。

私の一家がなぜ、鎮南甫に住んでいたかについては少し説明しておきたい。日韓併合(1910年)が行われ、祖父が四国の徳島の地から朝鮮半島で一旗あげようと渡ったのが始まりである。祖父は徳島で煙草の原料の仲買をしており、煙草の専売化に伴ってその仲買の権利を明治政府に売り、それを元手に新しい事業を始めようとしたのだ、と聞いている。目をつけたのが港のある鎮南甫を拠点に米を集荷し、日本へ送る精米業で、一時的に成功したが、株の投資に失敗するなど、朝鮮半島を離れた。父は鎮南甫で出生し、旧制中学校以後の教育は日本本土で受けたが、祖父の事業とは無縁だったようだ。しかし、これは私の一家の家族史に過ぎない。朝鮮の人から見ると、祖父は明治以後の日本帝国の植民地政策の先兵である植民者であり、その拠点の建設者でもある。父の逮捕も祖父との関連からであつたらしい。

話を私の戦後史に戻すと、私は1945年4月以降翌年10月に日本の小学校に転入するまで学校教育を離れていた。ソ連軍が進駐してからはソ連軍の指揮する少年労働隊の一員として雪の降りしきる中、小麦の袋を貨車積みする作業に従事したことがある。一定期間働くと、まとまった報酬が出て、それを母に渡すと涙をこぼしていた。ソ連軍の進駐以後は憲兵のゲーペーウー(GPU)が目光らせており、何かあると連れ去られ、シベリアの地へ送られるとの風評が大人、子供を問わず一般化しており、重苦しい雰囲気与生活を送っていた。威嚇射撃であろうが、むやみにマンドリンと呼ぶ自動小銃をぶっ放すソ連兵が怖かった。また、酔っぱらったソ連兵が一般家庭を襲い、女性をねらう、というウワサも流れており、夜間は家族全員が緊張して過ごした。思想教育らしきものを受けた覚えはなく、社会主義、資本主義の違いは帰国して成長する過程で身につけた知識で、抑留中はなんの先入観も持たなかった。

1946年10月、私の家族を含む集団を最後に鎮南甫に在住していた日本人は全員帰国した。母国は食糧難のどん底で、生活の苦しさは抑留期より深刻だった。私もいも堀りに狩り出され、母につ



いて食料の買い出しにも出かけたが、学校の健康診断で栄養失調寸前と診断されたこともある。しかし、私と同年代かそれ以上の年配の方々の戦時体験記を今読むと、米軍の空爆で肉親を失い、家屋を焼かれ、疎開生活を送った日々の記録には言葉もない。当時、何百万の人々がこの痛苦のなかで生きてきたことを考えると、私などの戦時体験は別天地であった、と考えざるを得ない。私はむしろ、戦後の方に重点をおいて一言書きおきたい。

私は1年遅れで小学校3年に編入したが、最初に受けたショックは、同級の男生徒が私を取り巻き、「チョーセン、チョーセン、パカニスナ」とはやし立てていじめにかかったことだった。私自身に対する侮辱よりも、日本人の朝鮮人蔑視の根の深さを思い知らされて驚いたのである。鎮南甫の街は日本人と朝鮮人の街区が明確に分けられており、日常的に朝鮮の子供たちと接することがなかったこともあるが、私たちは学校で朝鮮人も日本人なのだと教えられていて蔑視の感情を持つことはなかった。むしろ、敗戦の夜から数日、家の周囲に続いた地鳴りのような行列のすごさに日本統治に対して朝鮮民族の抱いていた本当の感情に気づかされ、民族差別を考えるようになっていた。児童とはいえ、底の浅い人間観から不和雷同して騒ぎ立てる日本人の原像を見た、とその時以来、今もずーとそう考えている。

成人してからも、夜中に自然発生的に起こった行列の叫び声は何であったのか、と考えることがある。私の結論は、自分たちの土地を取り戻し、その土地を踏みしめて自分たちの言葉で語る喜びを表現していたのだらうということだ。後年、よく朝鮮半島に鉄道のレールを敷き、道路を作り、電力設備を建設し、近代国家の骨格を作ったのは朝鮮統治時代の日本の投資によるものだ、と感謝されこそすれ恨まれる筋合いではない、と言わんばかりの文章に出会うようになったが、それは彼らにとっては土地を奪われ、生活の場を追われ公の場で自分たちの言葉を禁じられ、民族の誇りを失うことであった。どうして感謝することがあろうか。日本は敗戦後、植民地政策・侵略主義を深く反省し、新生の平和国家建設を目指したはずだが、その道を順当に歩んでいるのだろうか。

もう1点、私が戦後の日本社会に危惧の念を抱いているのは、民主社会の看板が看板倒れになっていないか、ということである。民主主義の根幹は人権の尊厳にある。一人一人の人権の尊重があってこそ民主主義の原理が生じてくるのである。民主主義は多数決だ、と手段を選ばず票集めするような社会が、どうして民主主義社会であろうか。それは、衆愚社会に過ぎない。国連の諸機関が行う各種人権調査では、日本は常に下位にあり、勧告もしばしば受けている。真に民主主義を確立するには100年200年の息の長い取り組み

「北朝鮮地図の画像」 検索



みが必要であろう。そのカギを握るのは教育である。その歩みはまだこれからである。

私の戦争体験は戦後社会へと向けられたが、私の願いは老いてなお、平和な民主国家の建設にある。

朝鮮で終戦を迎えて・・・ (2022.5)

平山 祐子(富士見が丘)

## 1. 太平洋戦争勃発

私は昭和 11 年(1936 年)生まれで現在 84歳です。父は仕事の関係で昭和2年に朝鮮の全羅南道・長興郡・冠山面(木浦モツポの近く)に渡り、私はそこで生まれました。



昭和 16 年 12 月 8 日、私はバスの中でまわりの人達が「戦争がはじまったようだ」と話していたのを聞いた記憶があります。それは、現地の日本人国民学校に入学する前のことでした。

父は医師として小さな診療所を開いていました。父のもとで働いていた人は、朝鮮人(今の韓国人)でしたが、戦争がだんだん厳しくなってきたのだと思いますが、私が国民学校 3 年生(学校は 1 年～6 年までで 11 人、先生は一人)になった昭和 20 年 4 月頃には、この人たちは家からいなくなっていました。

私がまだ子供であったということもあるでしょうが、日本の本土が空襲で焼きつくされ、広島、長崎が原爆で沢山の人の命を失ったことなどまったく知りませんでした。

## 2. 終戦の日

昭和 20 年 8 月、41 歳の父にも召集令状がきて、戦争に行くことになりました。その時、母は大きなお腹をかかえていました。臨月で、いつ赤ちゃんが産れてもおかしくない状態だったので。父は、母と(生まれてくる赤ちゃんも含めて)9人の子供達(私は3番目)を残して出征することは、たまらなく、つらかったことでしょう。ですが、国の命令であれば、出征しなければならなかったのでしょうか。

8 月 15 日、父は午前中に詰襟(つめえり)の服を着て出かけました。ところが、昼過ぎて、家に帰ってきました。「戦争が終わったそうだ」と言っていました。一番安堵(あんど)したのは母だったと思い

ます。ずっと後になって母から聞いた話ですが、父は出かける前に母に、「どうすることもできなくなった時はこれを呑みなさい」と薬を渡されていたそうです。終戦が1週間でも延びていたら、どうなっていたかと思うと、何か運命を感じます。

### 3. 終戦の実感

戦争が終わったという実感は 8 月 16 日からです。朝鮮の人達は、日本から解放されると喜んだのでしょうか。8 月 16 日の朝、学校へ行ってみようと思ったのですが、学校の窓ガラスは全部割られて何も残っていなかったと近所の人から聞きました。また、日本人学校の教師、警察官、近くの朝鮮人学校の日本人教師達は、15 日の晩のうちにいなくなったそうです。

9 月 1 日に末の妹が産れました。母の産後、10 日位の時、家に強盗が入りました。父が強盗をつかまえて、ほうかむりを取ってみると、隣に住んでいる朝鮮人だったのです。こんなこともあって、私達家族は近くの旅館にかくまって貰うことになりました。

また、朝鮮人が徒党を組んで、遠くの方からドンドコドンドコと太鼓をたたいてやって来るのです。それがとても怖くて、怖くて、外には出られませんでした。そんな時もやはり父が対応していましたが、父の職業が役に立ったのか、何ごともなく、彼らは家から遠のいて行きました。

9 月中旬頃、帰国の手だてがついたのでしょうか。この地を出ることになりました。これまでの財産はみな残して、荷物は自分達が持てるだけでした。荷車に荷物と産後の母と産れたばかりの妹をのせて、私達子供は、まだまだ暑さがきびしい中、とにかく着れるだけの服を着せられました。私はその上に、2 歳の妹を背負って距離が6<sup>キロ</sup>位ある「木浦(モッポ)」の港まで歩きました。そこから船で「釜山(プサン)」港まで、小さい船でしたから、揺れにゆれて、怖かったです。

「釜山」港では、日本へ帰る船が沢山停泊していました。日本に帰国するための手続きが必要だったのか、約2週間程度「釜山」にとどまりました。その時、食糧はどうしていたかわかりません。父母に聞いた覚えがありませんけれど苦勞したのではないかと思います。でもイワシかアジだったと思いますが、釣りをして天ぷらにして食べた記憶があります。ごちそうだったんですね。乳呑み児の妹は、母はもう乳が出なくなっていたのでしょうか。ごはんを炊く時に、おもゆを取って飲ましていました。痩せて目だけぐりぐりしていました。

日本への連絡船が近くに停泊していましたが、いつ乗れるかわからないのと、荷物がまた制限されるので密航船(お金を出せば乗れました)で日本へ帰ることになりました。

### 4. ようやく日本へ帰国

10月はじめに出航する時がきました。密航船は 150 トン級の船でした。5、6家族位が乗っていたと思います。玄界灘は荒れていました。またたくまに船酔いにおそわれゲーゲー吐いて苦しみました。

た。船にはトイレがなく、ミカン箱(昔は木の板だった)の底板を 1 枚はずした簡単な箱をデッキの外側につり下げたもの。船の外を見るだけでも怖いのに、その箱の中でトイレをすますのはとても勇気がいることでした。

この船も古かったのでしょう。2 日目に機械が故障して船が停まってしまいました。この荒波の中、一昼夜流されました。乗り合わせた人達の中には「私達はどうなるの？助けて下さい」と手を合わせて拝んでいる人もいました。3 日目にやっと対馬に流れ着き、船も修理され、九州の小倉に向けて出発することができました。

## 5. 日本内地での生活

故郷(熊本県の現在天草市)に帰った父の実家には 2 人住んでいましたが、そこに11人がお世話になることになりました。さぞかしびっくりされたことでしょう。長居はできません。とにかく着のみ着のまま帰ったのですから、家族11人が生きていくため、働く場所を探さなければなりません。父はつてを頼り、郡内のある無医村で働くことになりました。そこは小さな村ですから父の仕事がいつもあるわけでもありません。

10 月は芋の取り入れ時で、1 枚の芋畑を買い取り、取り入れた芋をふかして食べたり、輪切りにして干したり、また、なま芋をおろしですりおろし乾燥させて澱粉にしてだんごを作って食べたりしました。保存食用に沢山作りしました。

この村にはまだ電気が来ていませんでしたから、夜は石油ランプの生活でした。ごはんを炊くまき(たきぎ)拾いは子供達の仕事でした。それこそ、よそ様の山の中をかけまわり、枯木を拾い集めて持ち帰り、ごはんを炊いていました。

昭和 20～21 年ごろ、日本の復興はまだまです。引き揚げ者の私達にとって配給米が頼りでしたが、11 人家族でコメは 1 か月に 1 斗(14 ㍴)あればいい方で、アメリカのザラ砂糖であったり、たまにカンパンが少し配給されることもありました。そのくらいでは、とてもお腹のたしにはなりません。まして兄 2 人は高校(旧制中学が新制高校に変わった)に弁当を持っていかなければなりませんでした。弁当は弁当箱の半分位しか入れてもらえず、今思うと、いつもお腹ペコペコだったと思います。

配給の砂糖はお腹の足しになるわけではなかったので農家に持っていき、いも等と交換したり、また、母がせっかく持ち帰った着物は見る間に米に変わっていきました。そんなつらい思いをしたのは、「あんたたちばかりではないよ」と、よく言われました。本当に日本中が焼け野原になってしまったのですから。私の父親の時代は、長男は家を継いで産れた土地で生きられたのですが、2 男、3 男以下は生きる場を求めて、日本国内のどこか、または外国に出かけて行った人達が沢山い

ました。敗戦国になって、外地の日本人はやむなく日本に帰ってきました。その数 500 万～600 万人とされています。

こんな時代、昭和 22 年 5 月に新しい憲法が出来ました。私は中学生になった時、社会科で勉強しました。9 条には絶対に戦争はしませんとあります。

改憲とか加憲をいう人たちもいますが、今の憲法ほどいいものはありません。

今一度、読み返して自分のものにしたいと思います